



町おこしのためカラフル な田の神が並ぶえびの市

「回り田の神」と言って農家を次々に回って豊作を祈願するという。田の神に化粧し、ご馳走し、床の間に飾ることも。鹿児島では新婚の家に引越する「田の神戻し」という風習もある。

たのかんさあ 寂し楽し田の神



稲田の生育を見守り秋には森に帰った

村ごとに田植↓収穫を祈る「田の神」信仰があった。神殿はなく、山の神が春になると里に下って、田の神になり、稲田の生育を見守って秋には再び山に帰る、という全国的な信仰である。神には姿はない。



ところが、お杓文字と茶碗を持った田の神様が身近にあられたのである。柏市役所近く、呼塚交差点の角、市立砂川美術工芸館の植え込みのなかである。

姿を見せないはずの田の神が、春夏秋冬の市民の来館者を見守ってくれていた、ということになる。市民のご先祖は、過去も現在も、稲の生育

が気になる農耕民族の後裔なのだからだろうか。田の神が神出鬼没するはずがない。この工芸館の田の神様は、十八世紀初めに始まった薩摩藩独特の、田の神石像を刻み豊作を祈願した南九州から、たぶん砂川七郎氏が請来したものだろう。

上ので派手な田の神は、宮崎県えびの市のもの。農民型、神官型、自然石、地蔵型の四タイプがあり、「たのかんさあ」と呼ぶ。市内には百五十体あり、町おこしのために、新しく作られたものもあり、カラー化粧した田の神があちこちの田んぼの脇に建てられているという。「おつとい」と言ったり、豊作田の神は盗まれたりする（あとで返す）。また、タイトルの「寂し楽し田の神」は、なぜ「寂し」か、それは次ページへ。